

徳永さんとハンガリー史研究

南塚信吾

1. 徳永さんと私

私は、1972年10月から1974年3月まで、ハンガリー政府留学生としてブダペシュトで研究生活を送った。留学する前に、たしか百瀬宏さんの紹介だったかと思うが、徳永さんを新宿百人町のお宅にお訪ねして、いろいろと話を伺った。初対面だったのに、ずいぶんと親しく話をしていただいた。あの、書庫の本の谷間で。今、当時の手帳を調べてみると、9月23日(土)の秋分の日、午前10:30にお尋ねしているようである。確か事前にお電話して、道をお聞きして伺った覚えがある。

その時のメモから判断すると、大使館関係の人たちや、モンゴル語研究をしている松本幹男氏や、バルトクの研究をしている岩崎肇氏らを紹介してくださったようである。だが、わたしが今更驚いたのは、そういうことよりも、もっと基本的な問題を示唆されたようである。それは、私が手帳にメモしているところによると、

- 1) ハンガリー人とルーマニア人の関係 (「少数民族問題というのがあってね」)
- 2) カトリックとプロテスタントの関係 (「デブレツェンはプロテスタントの町ですよ」)
- 3) ハンガリーとロシアの関係 (大国と小国という関係)
- 4) ハンガリーとドイツとの関係 (「ハンガリー人は反ソ・反独でね」)
- 5) ユダヤ人の問題 (ユダヤ人が多い)
- 6) 亡命という問題
- 7) 歴史における連続性

といった問題について強い啓発を受けたようである。とくに1956年の事件について、「カーダールとナジは近かったのにね」といった理解を聞いて、やや驚いた記憶がある。そして、最後に、「これで僕はハンガリーの歴史はやらなくていいね」とおっしゃったのが印象的であった。

徳永さんは、翌1973年の春にハンガリーへお見えになったと記憶している。これはメモがないのだが、その時には松本氏やハンガリーの日本研究者ハラ・イシュトヴァーン君らと楽しく語らったのだ。

2. ハンガリー文庫との関係

1998年であったと思うが、ハンガリーの文化省から、ケペツィ・ベーラ氏が来日し、日本にぜひハンガリー文化のセンターを作りたいというので、相談を受けた。その時、氏には、日本の国立大学でそういうセンターを作ることは極めて難しいので、「ハンガリー文庫」といったものであれば、作

るのは比較的容易であると申し上げた。そして、千葉大学においてそれを作る可能性はあるのではないかと言ったところ、氏はその際にはハンガリー側から図書を寄贈することができると答えて帰国された。

たまたま当時の丸山学長がセント・ジェルジとの関係で、セグド大学といくつかの交流を持っていたこと、おりからデブレツェン大学との交流協定が結ばれたことなどがあって、宇野俊一図書館長の後押しを得て、図書館内に「ハンガリー文庫」を設置することができた。これには、文学部史学科に既に購入していた図書、ハンガリー大使館寄贈の図書、学長裁量経費によって購入した図書をまとめて、かなりの質のものができた。

この「ハンガリー文庫」の設置を機に、日本のハンガリー研究者の最初の全国集会を図書館で開催し、また「ハンガリー文庫ニュース」も発行したのであった。このとき、このニュースを聞きつけて、徳永さんからも数冊、図書の寄贈を受けたように思う。ただ、徳永さんとしては、ハンガリー関係の本はまとめてどこかに寄贈したいご意向であったに聞いていたので、われわれとしても働きかけることは遠慮していた。

3. 徳永さんと日本のハンガリー研究

ハンガリーの言語・文学関係は私としては判りかねるところが多いので、岩崎悦子、桑栄美子、深谷志寿の各氏に尋ねるほかはない。ここでは、ハンガリー史研究との関係でいづらか、話してみたい。

われわれは、1976年に東欧史研究会というものを設立した。そして、1978年から「日本と東欧諸国の文化交流に関する研究」というテーマでトヨタ財団から助成金を受けて、1981年に国際シンポジウムを開催した。この間、徳永さんに報告を依頼した。正確な題は記憶にないが、たしか、「私とハンガリー」といった題だったと思う。話は、1930年代から戦後までのご自分の体験であった。1938年に日本とハンガリーは日洪文化協定を結んだが、徳永さんはその協定に基づく第一回留学生としてハンガリーに渡ったわけであった。ハンガリーでの友人関係や本屋の話を興味深くしてくださった。そして、第二次世界大戦がはじまり、ハンガリーも戦争に突入すると、帰国せざるを得なくなった。その際、バルカンのブルガリアでしばらく滞在し、それから中央アジアを超えて、長い旅をして帰国する間の体験を、淡々とおもしろく話されたのを覚えている。

この話は、のちに『ブダペスト日記』（新宿書房、2004年）に収録された「ハンガリー留学日記」に沿うものであった。

実は、徳永さんは今岡十一郎氏の話はあまりされなかった。敬意を表してはいても、どこかに距離を置いていたように思う。そして思うに、徳永さんは今岡さんのように頑張らなかつたのがよかったのではないだろうか。

ともかく、今から見ると、文化史という面で、ハンガリー研究をする我々を、我々が知らないうち

に啓発してくださっていたのだった。

(みなみづか しんご・法政大学国際文化学部)